中国におけるブルジョアの権利論争

西村幸次郎 訳

訳者はしがき

中国におけるブルジョアの権利をめぐる議論は、一九五八―九年の時期と一九七五―六年の時期においてなされている。ここでは、はじめの時期の論争にかかわる代表的な三論文を訳出することにした。

そこで、つぎに論争の歴史的背景、論点、三論文の特徴等にふれ、一九七五―六年の時期の議論とのつながりを整理してきた。

論争の歴史的背景としておさえておくべきことは、第一に、一九五六年七月四日に「賃金改革についての決定」が出され、

中国におけるブルジョアの権利論争

それによって国营企業において八級賃金制が確立し「労働に応ずる分配」原則が一般的に実施される条件ができたこと、第二に、一九五六年末に農業、手工業、資本主義工商業に対する「三大改造」が基本的に達成され「働かざるものは食うべからず」の労働原則が基本的に確認されたこと、第三に、人民公社の出現によって、賃金制と供給制を結合する分配制度が実施されたことである。

こうした中で張春橋（当時、上海市党委員会文芸工作部長）が「破除資産階級の法権思想」（ブルジョアの権利思想を打破しよう）を上海『解放』半月刊第六期に発表（『人民日報』五八年一〇月一三日号に転載）し、論争の口火を切ったのであ

る。

張春橋によると、当時革命根拠地時代からの伝統をもつ供給制は、生産の積極性を刺激できず、「ゲリラ気質」「農村作風」であるとして、ブルジョアの権利思想の攻撃を受けた。そして、「等級賃金制」「出来高賃金制」は労働者が「自らの労働成果に対して最大の関心を示す」のを刺激し、「労働生産性が高まれば賃金も高まり社会主義競争の発展を刺激できる」のであり、それは「国民経済全体の発展の最も大きなテコ」であるとする考え方が抬頭した。張は「ブルジョアの権利思想の核心は等級制度である」とする見解を基本に、そして供給制生活の体験、上海労働者の意識及び古典理論をもとに、右のような供給制が生産の積極性を刺激できないとする考え方は、実際には、ブルジョアの等級制度の礼・法を用いてプロレタリアの平等関係にとってかえようとするものであり、「錢能通神(地獄の沙汰も金次第)」「鈔票挂帥(お札による統率)」であると批判した。そして「物質的刺戟原則」を推進した結果、党の幹部の中にも紳士ぶった態度、高等華人風、ダンナぶった態度がはびこり、名を争い利を求め、浪費し、大衆からはなれることを光榮とすることを刺激したのであり、等級制度こそ人を怠惰にし、指導幹部の中に抔まった「三風」、「五氣」、ブルジョアの権利思想、国民党の役人気質を徹底的に一掃しなければならぬとするの

である。

こうした張春橋の問題提起が直接的契機となつて、上海学术界や北京政法学界をはじめとする多くの分野で議論が展開された。張論文に対する種々の反響をふくんだそれらの議論は、各種の新聞雑誌(「人民日報」「光明日報」「政法研究」「學術月刊」「哲学研究」「經濟研究」「新建設」など)に発表され、その内容は多岐にわたつた。

「學術月刊」一九五八年第一二期に発表された同誌編集部「上海社聯六次座談資産階級法權問題綜述(上海社連ブルジョアの權利問題の六度の座談の綜述)」は上海哲学社会科学聯合会の討論内容を詳細にまとめている。「(はしがき)(本誌二五二—三頁)にみられるように、張論文との關係で一致した意見は、供給制の性質及びその優越性、「物質的利益」原則の一面的強調、「労働に應じて受け取る」原則の絶対化・凝固化に対する批判は正しいが、「労働に應じて受け取る」原則及び賃金制の歴史的作用に対する評価が一面的であり、また、ブルジョアの權利をただちに徹底的に一掃できるかどうか、どのように一掃するかの問題に対しては明確な説明がないとするものであった。また、ブルジョアの權利の核心は「等級制度」であるとする点、「ブルジョアの權利を制度化し、系統化し、いっそう發展させる」かどうかの点については、意見が分れたことを示してい

る。そして、本文では、討論内容を①ブルジョアの権利残余の存否と表現形態、②ブルジョアの権利は解放後系統化、制度化されたか、③「労働に依じて受け取る」の性質、④ブルジョアの権利の内容、⑤ブルジョアの権利とブルジョアの権利残余の区別、⑥ブルジョアの権利の核心は等級制度か、⑦解放後供給制から賃金制に改めるべきか、⑧今後の分配制度に対する意見の八つの柱からまとめており興味深いものがある。

「政法研究」一九五九年第二期に出された北京大学法律系科学小組「关于資産階級法権残余問題（ブルジョアの権利の残余の問題について）」は、その論調からみれば張論文に対する一定の批判のあることを読みとることができるのである。つまり、①ブルジョアの権利の残余問題、②ブルジョアの権利の残余の作用、③ブルジョアの権利を一掃する基本的道すじの三つの柱から論ずることによって、一掃の対象としてあげられていた「ブルジョアの権利思想」を分解して、ブルジョアの権利とブルジョアの権利の残余を区別し、後者の社会主義社会に存在する不可避性、政治による統率の下にその消極的作用を制限し積極的作用を発揮させること、また、その一掃のための道すじ、消滅の必然性を説得力をもって展開していることである。この論文は訳者のみるところ、当時の支配的な見解を示しているように思われる。

最近の一九七五—六年の時期における議論は、張春橋（当時、國務院副総理）「ブルジョア階級にたいする全面的独裁について」（『北京周報』一九七五年第一四号）、紀岩「ブルジョアの権利を制限する思想的武器」（同上第二二号）に代表されるように、ブルジョアの権利の残余ではなくブルジョアの権利そのものの存在、消極的作用を強調し、一九五八年における張春橋の考え方をいっそう精神主義的に傾斜させているように思われる。それは「走資派」批判の理論的武器ともされていた。

その後に出された『鞏固無産階級專政的根本大法』（一九七五年七月）は、「ブルジョアの権利の存在は、新しいブルジョア分子を生み出す重要な経済的基礎である」（二三頁）とし、また『馬克思主義国家学説講話』（一九七五年一〇月）では、「分配面のブルジョアの権利に対して、もしも制限を加えず、反対に拡大・強化するならば、必ずや等級の差異がますます大きくなり、少数の者が分配面である種の合法的、及び大量の不法的経路を通じて、大いに金もうけをし、名を争い利を求め、それによって社会主義的所有制の性質を変え、人と人の社会主義的相互関係を変え、資本主義とブルジョア階級分子が生まれるであろう」（八四頁）としている。このように、ブルジョアの権利の制限は、プロレタリア階級独裁のもとでの継続革命の主要な内容の一つにされているのである。

しかし、その後「四人組」の失脚によって、いわば客観的諸条件を十分に踏まえ、主観主義的な傾向をもつブルジョアの権利の制限は、強く反省をせまられているようである。今後の成行を注目したい。

なお、訳の上で適切でない点のあることを懸念している。ご叱責いただければさいわいである。

訳者注は最小限にとどめ、最後にとりまとめたことを付言しておきたい。

張春橋「ブルジョアの権利思想を

打破しよう」

およそ中国共産党と中国革命の歴史を少しでも知る人は、すべて中国共産党指導下の中国人民軍隊と革命根拠地内部において、工農赤軍からのちの八路军、新四軍、人民解放軍にいたるまで、また、井冈山根拠地からのちの広大な解放区にいたるまで、そこでは、従来から軍民平等、将兵平等、上下平等を人民内部の相互関係を処理する根本原則としてきたことを知っている。この原則は、もっとも早い革命根拠地井冈山において、毛沢東同志の直接的指導の下に創立されたものである。「井冈山

の闘争」という中共中央に対する報告の中で、毛沢東同志は書いている。

赤軍兵士の大部分はやとい兵部隊からきているが、赤軍にはいるとすぐに質が変わる。まず第一に、赤軍がやとい兵制度を廃止したことは、兵士に、他人のために戦争するのではなくて自分のため人民のために戦争するのだと感ぜさせている。赤軍にはいまでも正規の給与制というものはなく、食糧と食油、食塩、たきぎ、野菜などの費用、それにわずかばかりのこづかい銭を支給するだけである。……

湖南省委員会は、兵士の物質生活をすくなくとも一般の労働者、農民の生活よりはいくらかよくすることに気をくばるよう、われわれにいつてきている。だが、現在はその反対で、主食のほかは、食油、食塩、たきぎ、野菜などの費用として毎日一人あたりただの五分しかあてておらず、それさえ続けることは困難である。……こんなに寒いのに、多くの兵士はまだ夏服を二枚重ね着しているだけである。さいわいに苦しい生活にはなれている。しかも、その苦しさは誰もがおなじで、軍長から炊事兵にいたるまで、主食以外は一律に五分ぶんの食事しかとっていない。……

赤軍の物質生活がこのように粗末であり、戦闘がこのよう

に頻繁にやられているにもかかわらず、赤軍が依然としてくずれず維持できているのは、党のはたしている役割のほかに、軍隊内で民主主義が実行されているからである。上官は兵士をなぐららず、将兵は平等に待遇されており、兵士には会議をひらき意見をのべる自由があり、わずらわしい儀礼は廃止され、会計は公開されている。兵士はまかないを管理し、毎日五分の食油、食塩、たきぎ、野菜などの費用のなから少しばかり節約してこづかい銭にあてている。これを「食費の余り」とよんで、一人あたり毎日六、七十文もらっている。こうしたやり方に、兵士は満足している。とくに、新しくはいつてきた捕虜の兵士は、国民党の軍隊とわれわれの軍隊とではまったくちがった世界であることを感じている。かれらは、赤軍の物質生活が白軍より劣ってはいいても、精神的には解放されたと感じている。おなじ兵士で、きのうは敵軍内で勇敢でなかったものが、きょうは赤軍内で非常に勇敢になるのは、民主主義の影響である。赤軍はるつぽのようなもので、捕虜の兵士がはいってくると、たちまちとかししてしまふ。中国では人民が民主主義を必要としているばかりでなく、軍隊もまた民主主義を必要としている。軍隊内の民主主義制度は、封建的なやとい兵部隊をうちこわす重要な武器となるであらう。

中国におけるブルジョアの権利論争

正に、周知のように、人民軍隊内部のこのようなマルクス・レーニン主義的、共産主義的相互関係は革命根拠地内部の相互関係の模範になった。軍民関係において、政民関係において、軍政関係において、幹部相互関係において、上下左右の相互関係においても、同様にこのような同志的な平等関係を遵守する。人々は手に権力をもち武器をもつことにたよるのでなく、役人のいばる態度にたよるのではなく、また威風になよるのではなく、人民に奉仕することにより、説得にたよる、真理にたよって相互関係を処理するのである。革命根拠地の人民大衆も人民解放軍の態度に学んで、人民の間の相互関係を処理する。外から来た人は、これらの解放された土地に一たんふみこむとただちに次のことを発見するであらう。革命根拠地内部全体においては、内部関係を正しく処理することによって、人々の生活がかなり苦しいが、「さいわいに苦しい生活にはなれている。しかも、その苦しさは誰もがおなじで」あり、人々は共産主義的性質の供給制生活をしており、仕事の必要によって生活水準は大体のところ似たり寄ったりであるが、差異は大きくない。同時にいたるところで、政治を重視し、大衆路線を重視し、したがって工農兵学商は一致団結し、家族のように親しくして、刻苦奮闘し、英勇的に敵を倒した。人々はまだ解放戦争時期の

大兵団作戦の情景を記憶しているだろうか。人民解放軍を支援するために、何千何万という民兵が大軍にしたがって南下し、かれらは軍隊と同じように軍事共産主義的生活をし、一に昇官のためでなく、二に金もうけのためでなく、賃金を支払うことは全く考えられず、「出来高賃金制」などを実行することはいっそう思いもいたらなかつた。かれらは自己の糧食を自ら背負って革命を行なったのであり、かれらは心一つにして三大敵を打倒し、全中国を解放したのである。革命根拠地の全体、男女老幼、前方後方は、心一つにして、戦闘の集団を結成した。正に、このような軍事共産主義生活は、マルクス・レーニン主義の思想作風、毛沢東の思想作風が多くの人々の中ですでに根をはり、花を開き、実を結んだということを示している。このような共産主義的思想によって武装され、戦闘鍛錬をへた軍隊と人民は天下に無敵であり、このことは中国革命の全歴史がすでに証明しているのではなからうか。

全国解放以後、このような「供給制」を特徴とする軍事共産主義的生活はさらにならぬ歓迎された。「供給制」をもち出すことは、古くからの革命を語り、刻苦奮闘を語ること等々と同様、人々は光榮であると考え、若干の革命的青年は活動に参加するや「供給制」であることを希望し、自ら古参同志と同じように誠実に革命を行なうことを表示した。もともと供給

制生活になれた同志は、賃金制などをしたわず、人々は平等の相互関係を表現する生活制度を愛好した。しかし、ほどなくこのような生活制度はブルジョアの権利思想の攻撃を受けた。ブルジョアの権利思想の核心は等級制度である。このような思想を堅持する人々からみると、供給制というものは全くとるべきものはない。かれらは、それは「農村作風」「ゲリラ気質」であると輕蔑している。このような議論はブルジョアジーから出ているが、もともと怪しむに足りない。しかし、ほどなくわが党の幹部の中には、このような思想の影響を受けた人が少なからずでてきた。かれらの中では、供給制の欠点を論ずる議論がしだいに多くなり、賃金制の長所を論ずる議論がしだいに優勢を占めた。のちになると、供給制は悪い名称の一つになったようである。ある人は仕事が積極的でなく、「仕事をしてもしなくても二斤半！」、このことが供給制の帳簿にかかれる。ある人は、国家の封筒を用いたが「公私不分、供給制作風！」、これもまた、供給制の帳簿にかかれる。工場、商店が経営不振で損をしても「供給制思想！」がまた供給制の帳簿にかかれる。要するに、共産主義的供給制、中国革命の勝利を保証した供給制は、何人かの人々によってあなたも大罪を犯し、死刑にしなければならぬかのように攻撃された。

人々が供給制を攻撃する最も根本的な理由は、供給制が生産

の積極性を刺激できないということである。彼らの理論的根拠は、経済学者たちの強調する「物質的利益の原則」である。言うところによると、社会主義制度下において、なおも少なからぬ旧い分業の残余、つまり頭脳労働と肉体労働の間、労働者の労働と農民の労働の間、熟練労働と単純労働の間の差異が存在していることによって、「工作者が物質的利益から労働結果と生産発展に関心をもつ原則」は、まことに不可思議であるといわれている。「等級賃金制」「出来高賃金制」なるものは、労働者が「自らの労働成果に対して最大の関心を示す」ことを刺激でき、「労働生産性が高く、賃金も高いので、社会主義競争の発展」を刺激でき、このような制度は、「全国民経済発展の最も重要なテコ」であるとか、理屈はいくらでもある。しかし、すっぱぬいて、やや通俗的にいうならば、やはり、あの古くからいわれている「地獄の沙汰も金次第」ということである。高い賃金によって「刺激」しさえすれば、金を払ってアメ菓子をかうのと同じように、社会主義、共産主義というものはただちに手に入れることができる。

このような理論に対して、われわれはどのようなことをいうことができるか。

「供給制」の状況の下で、非常に多くの人は数十年の武装闘争をおこない、雪山をのぼり、草地をいき、二万五千里の長征

は誰が賃金を支払ったろうか。抗日戦争、解放戦争、抗米援朝戦争の勝利は賃金によって刺激できたであろうか。このような議論をきいて、共産主義的思想自覚をもった人々は、侮辱を感ずるほかに何をいうことができようか。建設事業においていえば、ほかでもなく、正に経済学者によって、自己の賃金の高低にもっとも関心をもっていると考えられている労働者たちが、経済学者と根本的に相反する意見を述べている。上海の労働者たちは、大鳴大放弁論によって、このような理論と方法が「お札による統率」であって政治による統率でないということとを鋭く指摘した。正に一語のうちに打破されたのである。さらにこれ以上にいっそうはつきりと言いえようか。当然に、われわれは共産主義のはじめの段階、つまり社会主義社会において、マルクスが『ゴータ綱領批判』において正しく指摘するよう「この共産主義社会は、あらゆる点で、経済的にも道德的にも精神的にも、それがうまれてきた母胎たる旧社会の母斑をまだおびている」ということを否定しない。「ブルジョアの権利」の不平等はまだただちには取消することはできない。「それぞれ能力に応じて働き、労働に応じて取得」できるだけで、まだ「それぞれ能力に応じて働き、それぞれ必要に応じて取得すること」はできない。しかし、マルクスのこのことは、ブルジョアの権利、ブルジョアの不平等の等級制度は根本的に破

壊できず、かえってそれを制度化・系統化し、いっそう發展させるべきかどうか、「物質的利益」原則だけを一面的に強調すべきで、政治上、思想上、道徳上から共産主義的教育を強化して、ブルジョアの権利を徹底的に一掃するために闘争すべきでないかどうかを、われわれに教えているのではなからうか。ほかでもなく、マルクス自身がこのような問題に答えている。彼は、『フランスにおける内乱』という本の中で、パリ・コミューンの経験を含括し、彼はとくに強調して、パリ・コミューンの英雄たちがとる次のような措置を賞讃した。つまり、「コミューンの議員をはじめとして公務は労働者なみの賃金で果たされなければならなかった。国家の高官たちの既得権や交際費は、高官たちそのものとともに姿を消した。」³⁾「こらんいただきたい。パリ・コミューン—全世界のはじめてのプロレタリアートのコミューンがとつた革命的措置は正にブルジョアの等級制度を徹底的に破壊し、物質的利益原則なるものを重んじなかつたのではないか。マルクス及びそののちのエンゲルス、レーニンも再三このような経験を強調するときに、かれらはまだブルジョアの権利等々があるというのを忘れもしなかつたではないか。みるところマルクス、エンゲルス、レーニンは、これらの「物を見て人をみない」、「金をみて人をみない」、「地獄の沙汰も金次第」の経済学者を手助けすることはなかつた。レーニンは

『国家と革命』という本において、かえって憤慨して「ほかならぬ、このとくに明瞭な、一国家問題についてはおそらくもっとも重要な点で、マルクスの教訓がもっともわずれさられているのである」と指摘し非難している。多くの人はこの経験にふれるとき、つねにそれを「時代おくれになつてゐる『幼稚行為』である」とみなすのである。供給制を攻撃し、お札による統率を主張するような人々は、供給制なるものが「ゲリラ作風」「農村氣質」であり、「時代おくれになつてゐる」ものともいうのか。彼らは「マルクスの教訓をすっかり忘れさつた」のではなからうか。

数年来の実践をへて、「供給制」に対する、また「農村作風」「ゲリラ氣質」に対する攻撃は、実際にはブルジョアジーが不平等のブルジョアの権利を保護するためであり、プロレタリア的革命伝統に打撃を加えるためであり、勤労人民内部の相互関係を正しく処理する共産主義的原则に対する攻撃であることが証明された。一切の搾取階級・抑圧階級はいずれも厳格な等級制度を保護する。彼らはおしみなく各種の神話を捏造し、自らが「天子」であり、天生のこの世の主人であるという。蔣介石というこの世の悪徒は、『中国の命運』という本の中で、恥知らずにも彼の血統が文王の子孫であると自称し、彼の伝記は、彼が文王の子—周公の子孫であるといっそう具体的に言つてい

る。このような神話は「笑林広記」に編入すべきであるが、彼らは自らをあまりにもせっかちに天生の中国の「最高」に変装していることをみることが出来る。上海の買弁たちも、「高等華人」を光榮としてゐる。阿Qは、ひとこと彼が「趙だんなと同族である」といっただけで、趙だんなに思いきり頬をなぐられた。「おまえが趙であつてたまるかーおまえみたいなやつが、どこを押せば趙といえるんだ。」旧時代においては、全社会において、趙というかどうかということから、着衣、食事、住宅、歩くこと、歩くその速さ、タバコを吸う姿勢にいたるまで、どれをとつても身分等級を重んじないものがあるか。「礼」をもたないものが何一つあろうか。礼に合うか、礼に合わないかが、つまり合法的であるか合法的でないかということであつて、いたるところにブルジョアの権利が存在するのである。供給制が生産の積極性を刺激できないと攻撃する人たちは、実際には、ブルジョアの等級制度の礼、法をもつてプロレタリアの平等関係にとつてかえようとするものである。彼らは、このようにして生産の積極性を刺激できるという。本当にこのようであるか。彼らがこれを推進した結果、わが党の幹部の中には、もとの生活水準の相違の多くない状況が改められ、早くも刻苦質素の生活に耐えられない、若干の人々は、たちどころに紳士ぶる態度、高等華人ぶる態度、趙だんなの態度を学びとつたの

である。ある幹部は、顔を合わせるとき、何々「長」といわれないと不気嫌である。これは確かに刺激的作用を果たした。しかし、生産の積極性を刺激したのではなく、名を争ひ利を求め、積極性を刺激し、浪費を拡げることを取とせず、かえつて光榮とする積極性、大衆からはなれることを恥とせず、かえつて光榮とする積極性を刺激し、もつとも確固としていない若干の分子はブルジョア右派分子、汚職腐敗分子に墮落した。もともとある人は、供給制が人々を怠惰にしようといつた。今や、全く反対に、等級制度こそ人を怠惰にしようことを証明している。ある幹部は、一時間余分に仕事をすると、残業手当を計算している。それに対して、供給制の条件の下で革命戦争において自己の一切、ひいては生命さえもささげた人々、かれらはどんな手当も計算しなかつたではないか。いっそうひどいことは、このような氣風がひろまり、幹部と勤労人民との相互関係が変化し、指導幹部の「三風」「五氣」がひろまつたことである。政治による統率、平等に人に対すること、大衆に対するに説得できるだけで強制できないこと、大衆と打つて一丸となること、これらすべてのことは、若干の人々にあつてはすでに完全に忘れさられており、ひいては党中央が人民内部の矛盾を正しく処理する指示を發したのちに、彼らの一つ一つの抵抗にぶつかつたのである。このことは、われわれが身をもつて

経験した事実ではなからうか。

このことを回想することは、われわれ一人一人にとって深い教育的意味をもつ。この過程において、われわれ一人一人が、何に賛成し何に反対するかの情況は異なり、受ける影響の程度も異なるが、しかし、この中から必要な教訓をさがし出すことができる。

というのは、党の伝統はマルクス・レーニン主義であり、わが党の幹部と人民大衆の中に根をはっており、それは何らかの破壊をこうむっているが、回復することはそれほど困難ではないからである。今、党中央と毛沢東同志のよびかけの下に、偉大な整風運動を経て、またそれを回復したのである。しかし、われわれは、すでに徹底的になしとげたとはまだ言いえない。ブルジョアの権利思想、国民党の役人氣質は、まだ人々に影響している。人民内部の矛盾を正しく処理する方針は、まだ若干の人の抵抗を受けている。われわれの面前には、なおも長期の反復する闘争の過程がある。しかし、大躍進の情勢が、われわれが相互関係を調整する側面において躍進、再躍進することを切実に要求している以上、共産主義事業に忠実な一切の同志たちは必ずや運動の先頭に立って、わが党のこのような光榮ある伝統を、新しい条件の下で、徹底的に回復、発揚し、ブルジョアの権利思想を徹底的に一掃し、大衆と平等の相互関係を樹立

し、上下左右完全に一丸となり、皆がともに生活し、ともに労働し、ともに仕事をし、一致して社会主義と共産主義のために奮闘する、このことに何の疑いがあるうか。

学術月刊編集部「上海社連ブルジョアの権利問題の六度の座談の総述」

「人民日報」が張春橋同志の「ブルジョアの権利思想を打破しよう」という一文を転載してから、この問題に関連する討論を展開したのち、上海市社会科学連合会及びその所属法学会もこれを中心にあわせて六回の座談会を組織した。一〇月下旬から十一月中旬までにあわせて六回の座談会を行ない、参加人数は二百余人に達した。討論に出席したものには、高等学校、新聞出版部門、及び政法、財貿、労働工資等の業務単位の一部の理論工作者と実際工作者を含んでいる。本刊第十一期は、第一回座談会の記録を整理して発表し、いままた各回の座談の情況を総述すればつぎのとおりである。

座談会は、張春橋同志の文章は全体的精神及び基本論点において一たとえば供給制の性質及びその優越性、「物質的利益」原則を一面的に強調し「労働に応じてうけとる」原則を絶対

化、凝固化することを批判すること等に関しては、いづれも正しい、とあまねく考えた。文章の中のいくつかの重要問題についてはことなる見方を提起しており、たとえば、「労働に應じてうけとる」原則及び解放後実行した賃金制の歴史的作用に対する評価は充分でなく一面性を有する。また、当面ただちにブルジョアの権利を徹底的に打破できるか否か、及びどのように打破するかの問題に対しては明確な説明がない。同時に、文章のなかで提起されているブルジョアの権利の核心は「等級制度」であり、さらに解放後「ブルジョアの権利を制度化し系統化し、いっそう発展させる」かどうか等の問題については、座談の中でことなる意見が提起され、弁論を展開した。

何がブルジョアの権利か

ここには二種の見解がある。(1)それは法律にまで高められたブルジョアジーの意志である。(2)それは、ブルジョア国家権力によって制定され、習慣の力によって認可された人々の行為規則の総体である。

何がブルジョアの権利思想か。三種の見解がある。第一、ブルジョアの権利思想はブルジョア思想の表現の一つであるが、ブルジョア思想は、完全に例えば絶対民主化、絶対平均主義思想等のブルジョアの権利思想であるわけではない。第二、ブル

ジョア思想はブルジョアの権利思想である。第三、ブルジョアの権利思想は、ブルジョアジーの法律観点をなわち旧法観点である。

ブルジョアの権利思想とブルジョアの権利の残余に区別があるかどうかについても、二種の見解がある。(1)根本的区別はなく、残余は残された思想を指す。(2)区別があり、ブルジョアの権利の残余は、歴史的條件によって決定されるのであり、条件にもとづいてしだいに消滅すべきであるが、ブルジョアの権利思想は一げきのもとに打ちのめすべきである。

ブルジョアの権利及びブルジョアの権利 残余の区別

十一月四日法学会の召集した座談会において、ブルジョアの権利及びその残余は区別すべきことを一致して認めたが、区別がどこにあるか。それには二種の異なる意見がある。

第一種の意見は区別が三つの点にあると考える。(1)ブルジョアの権利の基礎は資本主義的搾取制度であり、ブルジョアの権利の残余の基礎は、社会主義的公有制である。たとえば「労働に應じてうけとる」原則をあげてみるならば、それは人々の経済上の事実的不平等を承認するが、それは搾取制度を強固にしないで搾取に反対する。当面において「労働に應じてうけと

る」を実行するほかはないのは、生産物が十分に豊富でなく、人々の共産主義的自覚がまだ充分に高くないという理由によるのであり、だからブルジョアの権利の残余の基礎は私有制ではない。(2)ブルジョアの権利は資本主義的性質であり、ブルジョアの権利の残余は社会主義的性質である。例えば、選挙法は都市の工礦区では一〇万の人口が代表一名を選び、農村は八〇万の人口が代表一名を選ぶと規定する。この事実上の不平等の原因は当然なおも都市農村の差異が存在することにあり、労働者階級の指導権を保証するためであり、農民を圧迫するためではない。従って、それは社会主義的性質である。(3)ブルジョアの権利は、われわれによりすでに暴力によって消滅され、ブルジョアの権利の残余に対しては条件を創り出して、人々の思想的自覚を高め、しだいに消滅するほかはない。

第二種の意見は、上述の論点に反対する。ブルジョアの権利及びその残余は資本主義的性質であり、資本主義的私有制を基礎とすると考える。現在わが国にブルジョアの権利の残余が存在するのは、過渡期の社会が旧社会から生れでたばかりであり、いくつかの社会的条件がまだすべては改められず、人々の思想がなおも実際からたちおおくれている理由による。われわれはこれらの残余に対して徐々に消滅すべきである。もしもブルジョアの権利及びその残余を社会主義的性質であり、公有制を

基礎とするとみなすならば、理論上事実上においてもあてはまらない。

ブルジョアの権利の核心は「等級制度」であるか否か

五種の異なる意見がある。(1)張春橋同志の文章の中に提起されている「ブルジョアの権利の核心は等級制度である」の論点に同意する。(2)ブルジョアの権利の核心は法律の形式によって固定された神聖不可侵の私有財産権である。(3)ブルジョアの不平等を指し、あるいは偽りの平等、形式上の平等をいう。(4)上述の三つの内容を含む。(5)若干の人は、ブルジョアの権利の核心は「労働に応じてうけとる」であると考え。上述の四種の意見は第五種の意見と根本的に対立する。第五種の意見は、ブルジョアジーの法律は、私有財産不可侵、多酬多勞、不酬不勞であり、わずかな金も争うのは一切が金銭のためであると考え。そして「労働に応じてうけとる」の中心は、すべてが銭のためであり、銭を衡量の尺度とし、人を銭のためにはたらかせる。このために労働に応じてうけとることがブルジョアの権利の核心である。一部の人は、ブルジョアの権利の核心が等級制度であることを主張する。なぜならブルジョアの権利のもつともきわだっているものは、資本家と労働者の一連の等級制度、

すなわち不平等関係に表現され、あらゆるブルジョアジーの法律も資本家と労働人民の間の不平等関係をうちかためることにある。わりに普遍的な意見は、ブルジョアの権利の核心は法律の形式で固定された私有財産不可侵の権利を指し、これは資本主義社会の基礎であり、いかなるブルジョア法律もこの点を確認している。資本主義以前の搾取階級社会も私有財産権を擁護するが、資本主義社会になつてこそ、それを高度の神聖化にまで高めたのである。しかるに、等級制度は封建社会においていっそう前面に出、同時に資本主義社会における等級制度も、経済上——私有財産の神聖化、生産手段の資本主義的所有権を通じて目的を達成する。このために、ブルジョアの権利の核心は、等級制度もしくは偽りの平等ではなく、後者はブルジョアの権利の特徴にすぎない。

ある人は、張春橋同志の文章が提起した核心問題は、当面のブルジョアの権利の残余の表現の中心が等級制度であることを指すと考える。明らかに、現在われわれは重点的に等級制度、特権思想を打破し、肉体労働軽視、勤労人民軽視を打破し、真の人と人との間の平等関係樹立を達成すべきである。

当面においてわが国にブルジョアの権利の残余は存在するかどうか及びその表現はどうか

今日、わが国にはブルジョアの権利の残余は存在するかどうか。二種の意見がある。(1)存在するだけでなく、ブルジョアの権利が存在し、わが国憲法が明文で資本家的所有制の保護を規定しているが、それが一例である。(2)ブルジョアの権利としての資本主義的搾取制度はすでに消滅した。今日、ブルジョアの権利の残余が存在するだけである。以上の例についていうなら、ブルジョアの権利の残余にはかならないのであり、というのは、憲法は資本家的所有制を保護することを規定するが、それとともに「国家は、資本主義的工商業にたいしては、利用・制限・改造の政策をとる」「国家は、資本家が公共の利益をそこない、社会経済的秩序をみだし、国家の経済計画を破壊するといったの不法行為を禁止する」と規定し、私有財産の神聖不可侵のブルジョアの権利の観点をけつして認めないからである。的があつて矢を放つように、いっそうよく条件にもとづいてしだいにブルジョアの権利の残余を打破する。座談会においても、当面わが国に存在するブルジョアの権利の残余の表現形態についても、かなり多くの意見が発表された。ある人は、若干

の人々の労働に対処する問題、例えば、労働を商品化し、「労働は報酬を計算に入れず、仕事は条件をとやかくいわない」ではなく、「報酬に応じて労働し、等級に応じて出来高計算すること、等級観念によつてことなる社会的分業を扱うこと等にはつきりと表現されると考える。次に、不平等の観念で人と人の関係を処理すること、及び賃金、福利上のいくつかの不合理現象に表現される。ある人は「労働に応じてうけとる」、債権債務、相続権および納税、資本家が高い給料をとること等に表現されると考える。法学会の座談会においては、それは制度上と人々の思想意識の両側面に表現されるとあまねく考えた。制度上において、たとえば国家・法律の存在、それ自体がブルジョアの権利の表現の一つである。また、たとえば憲法は、資本家と個人生産者の財産所有権および一切の買戻しの性質の措置、労働にに応じてうけとること、都市家屋の個人的所有権等を保障する。思想意識から、法院の分野においては、民事事件処理にあつての私有財産観念の確保に主として表現される。ある人は、ブルジョアの権利の残余の高等教育界における表現は、等級賃金の評価、一定年限の昇進制度、労働日、労働量制度、助手は授業できないこと、原稿料制度等であると考える。

解放後ブルジョアの権利は系統化、制度化されたか

基本的に二種の意見がある。

一種の意見は、張春橋同志の文章の中では主として分配の角度からこの問題をのべていると考える。この角度からいえば、ブルジョアの権利は解放後「全体としていえば、複雑化、系統化し、ある地方では発展した」。例えば、賃金制度の情況についてみると、解放後の賃金には、おおよそ出来高賃金制、時間制プラス奨励賃金制、時間制賃金制の三種類がある。時間制賃金制には、また技術等級賃金制、持場賃金制および職務等級賃金制等々があり、また技術等級は若干の項目に分けられる。出来高賃金制には、また個人出来高賃金制、集団出来高賃金制、請負工事制および車旁提成制度等々がある。奨励賃金には、分類がいろいろ多く、一〇余種あり、たとえば労働競争奨励、ノルマ超過達成奨励、品質奨励、経済採算奨励、合理化建議奨励、安全生産奨励、任務完成奨励すらある。このほかに、さらに各種各様の手当、たとえば技術手当、職業手当、高温手当、保全手当、管理手当、代理職務手当等々がある。ここからみられるように、賃金制度は複雑で、比較的に系統的でもあり、また、

すでに、この複雑で系統的賃金制度を理論化し、「出来高賃金は蓄積に最も有利な賃金制度である」、「奨励賃金は効果を重んじなければならぬ」等々を提起し、従って、「この角度からいえば、ブルジョアの権利の系統化、制度化は「道理がある」。当然ながらこのような言い方は、解放前の賃金制度が解放後に比べて好いとして理解できない。解放前の賃金制は基本的に、資本主義の利潤によって転換する盲目的生産の特徴を反映し、賃金も無政府状態にあり、高すぎたり低すぎたりする現象はきわめてきわだつており、高すぎるものはいずれも資本家の親戚友人およびかれにはめられた人であり、低すぎるものはいずれも勤労人民であり、このような賃金制度は労働を報酬取得の尺度としない。解放後賃金制の性質はすでに根本的に変化し、同時に低すぎたり高すぎたりする現象に対してひとわたり調整し、これによって解放後は解放前に比べていっそう合理的でなければならぬ。しかし、賃金制度は複雑であり、いくつかの欠陥をもたらしした。すなわち、(1)人々が個人から出発して細かく比べあわせるのを助長する。(2)差異を拡大し、労働者内部の団結を妨害する。(3)管理の複雑化をつくりだし、人力物力を浪費する。(4)それぞれ必要に応じて取得することに移行するのに不利であり、今後の消極性をつくりだす。

もう一つの意見は、上述の論点に反対する。まず全体的側面

からみると、解放以来、われわれはブルジョアの権利及びその思想に対して、ずっと闘争をおこなってきた。例えば、所有制における連統革命、思想改造における大規模な大衆的思想教育運動等である。ブルジョアの権利の残余は、資本家の私有財産を保護する問題のように、わが国の憲法に反映されているが、これでわが国の法律がブルジョア法律であると考えることはできない。というのは、われわれの立法の本質は社会主義であり、労働者農民大衆の意志を代表しているからである。われわれは、それがそれを消滅する前提であることを認める。同時にわれわれがブルジョアの権利の残余を保留することも、暫時的、局部的で、やむをえない。けつして、それを無期限に全面的に保存するのではない。

次に、分配問題から考察すると、解放後ブルジョアの権利が系統化し制度化したとする見方も国家の現実的情况に合致しないと考えられる。分配問題において、われわれは生産から出発し、政治から着眼すべきことを一貫して強調し、個人的利益が国家的利益に従い、眼前の利益が長期の利益に従うことを強調し、労働同盟及び国全体の利益と個人の利益とを考慮し、適当に按排するのに有利であることを強調した。実際情況からみると、分配問題におけるブルジョアの権利もしいにより、共産主義的要素がしだいに増大する。たとえば一九五一年全国

の八万以上の大工場が労働保険を實行し、このことは、根本的に、等級、職位によつてではなく必要にもとづいて行なうものであり、そのほか機関における困難補助制度等である。そのため、全体的情況および分配の角度もしくは實際の情況からみれば、上述の意見は正しくない。

「労働に應じてうけとる」の性質問題

いくつかのことなる見方がある。

第一種、「労働に應じてうけとる」は資本主義的性質であり、ブルジョアの権利である。ブルジョアの権利は、私有財産を保護し、特権等級を保護し、個人主義を保護し、また「労働に應じてうけとる」は正にブルジョアの権利と全く合致する。第一に「労働に應じてうける」の概念そのものは完全に私有財産からきており、多勞多得を強調する。つぎに、それは労働において等級をわけることに表現され、等級が多いほど「労働に應じてうけとる」に合致するようである。第三に、若干の人が仕事の関心、嗜好および個人の自由、個人の利益を強調するのに役立つ。たとえば「労働に應じてうけとる」は、貨幣形態で賃金を支払うものであり、その結果は個人的生活習慣、個人的見栄、すべてが個人に従ひ集団を顧みないことに迎合しやすく、それゆえにブルジョアの権利である。ある人は、それは工作能力の

違いもしくは家庭負担の違う勤労者についていえば不平等であり、それゆえにブルジョアの権利であると考える。

第二種、「労働に應じてうけとる」は民族ブルジョアと同様に二面性があり、それは一面でブルジョアの権利に転化することがあり、他面で搾取階級の働かずして得もしくは少し働いて多く得および働いても得られないというようなブルジョアの権利と闘争することができる。

第三種、社会主義的性質である。かれらは、プロレタリアートの平等原則は、搾取を消滅し、階級を消滅することであり、社会主義の条件の下で、商品生産の過程、等価交換の過程は、人民の物質的文化的必要をみたすための過程であつて、搾取の過程ではなく、「労働に應じてうけとる」には搾取がなく、当然ながらプロレタリアートの平等原則に合致するからには、根本的にブルジョアの権利ではなく、それは当時の生産力が高くなく、まだ物質的刺激的の生産を必要とする情況の下でとらなければならぬと考える。

第四種、社会主義的性質に属するが、ブルジョアの権利の残余を帯びる。「労働に應じてうけとる」原則は、労働者が彼自らが創造した生産物の中から、拡大再生産およびその他の社会的必要に用いられる部分を控除したのち、各人の労働の質と量にもとづいて取得する一定の分け前であり、多く労働するほど

よく社会的生産物の中から得る分け前も大きくなり、反対の場合には少なくなる。このような「働かざるものは食うべからず」の原則にもついで等価交換する分配制は、社会主義段階においては不可避的である。それは、資本主義の働かずして取得する分配制度に比して進歩的、合理的である。しかし、このような分配制度は、依然として物質的利益の刺激に依拠しており、人の自覚に完全に依拠して人の労働の積極性を向上させるものではない。生活手段の上でも必要にもつかなないで、商品の等価交換の原則にもついで分配を行なうのであり、それは人と人との間の事実上の不平等現象の存在を反映する。例えば、家庭の人口が少なく労働力が強い場合は生活は良い。反対の場合はおとる。マルクスは『ゴータ綱領批判』において、社会主義的平等の権利の側面ではまだブルジョアの権限の制限（制限は生活手段分配における不平等を指す）を受けていると述べている。物質的条件がきわめて豊富な共産主義社会になって「それぞれ必要に応じて取得すること」によってそれにかえるときにこそ、このような人と人との間の事実上の不平等現象を一掃するのである。従って「労働に応じてうけとる」は一定の歴史的過程の産物であり、それを肯定もし、またそれを否定もするのである。

座談の中でごく一部の人は「労働に応じてうけとる」は資本主義的経済法則であると考える。また、ある人は、労働に応じ

中国におけるブルジョアの権利論争

てうけとるといふ分配原則は経済的範疇に属し、上部構造ではなく、従って根本的にはそれを権利とはみなしえないことを提起する。

「労働に応じてうけとる」の実行が個人主義をもたらずかどうかについては、三つの見方がある。(1)賃金制、とくに出来高賃金制は若干の人の個人主義をもたらし、ノルマを超えやすい仕事を選択してやること、先進的経験を紹介しようとしないうと、とくに等級賃金の評価の前後に、各種の個人主義思想がきわだつことにあらわれており、このことは明らかに賃金制によって刺激されたものである。(2)個人主義は完全に旧社会が遺留したものであり、賃金制とは関係がない。賃金制を実行する前には、名を争い利を求めている人もいる。同様に、賃金制の情況下で、それによらずに個人主義をほびこらせる人もいる。(3)個人主義は賃金制にもとづくのではないが、それは一定程度個人主義を助長した。

解放後供給制から賃金制に改めるべきか

これは何回かの座談会が普遍的に言及した問題である。座談において、全国解放後ただちに全人民の中で供給制を実行することについて、一致して不可能であると認めた。しかし、もとも供給制を実行した幹部が賃金制に改めるべきかの問題につ

いては、三つの異なる見方がある。(1)供給制から賃金制に改めることは、誤りであり後退である。(2)これは進歩であり、歴史的発展の必然である。(3)賃金制に改めることは認めえないものではなく、いつそよいことは二種の制度(供給制、賃金制)の併存であり、供給制の範囲をしないで拡大することである。

上述の意見の中で、第一と第二の意見の違いは比較的に大きい。第一の意見の論拠は、賃金制に改めることは一定程度ブルジョアの個人主義を助長し、ブルジョアの権利の残余の陣地を強化し、共産主義的精神の発揚を押し、ブルジョアの権利の残余を一掃するために困難を増加したとする。第二の意見は、解放後の賃金制は戦時の物質的条件がきわめて貧困な状況の下で実行された供給制に比べて進歩であり、というのは後者は大きな伝統を体現しているが、それは軍事共産主義制度であり、特殊な状況の下でやむなく実施されたものであり、それは「それぞれ必要に応じて取得する」ではなく、「必要に応ずる取得の制限」であるとする。同時に、解放後からまだ生活手段の私有制を保留し、頭脳労働と肉体労働の差異がなお存在し、生産力水準が高くなく、物資がまだ豊富でなく、全国には、労働力を有する人々はまだすべては就業しておらず、共産主義的自覚がまだ全人民の中で優勢を占めておらず、さらにその他の実際的困難があり、賃金制の実行は必須である。第三の意見は、賃金制

に改めることは何らの誤りもなかったし、実行の結果は生産を繁栄させ、人民を團結させたとする。もし誤りであるとすれば、上述の状況を理解しようがない。しかし、賃金制にいくつかの欠点が存在することにかんがみて、さらに長期的発展的な眼からみるならば、革命的伝統を保持、発揚し、ブルジョアの権利の残余を打破するのに役立てるために、両制度の併存を考慮し、もともとの供給制を保留し改善し、その基礎の上にその範囲をしないで拡大することができる。

ある人は、賃金制の実行は正しいが、当時供給制から賃金制に改めるときに、ある人は「労働に応じてうけとる」原則を絶対化、凝固化し、また同一労働同一賃金、「労働に応じてうけとる」を強調したとする。また、供給制に対しては「そう否定しているようである。供給制のなかの革命的要素(たとえば等級が比較的に小さい)はそれほど多くは保留されていない。また、ある人は、これまで若干の人は「労働に応じてうけとる」原則に対していくつかの誤解があり、次の諸点に表現されるとする。(1)「それぞれ必要に応じて取得する」と「労働に応じてうけとる」という二つの共産主義の段階の異なる分配原則を完全にひきさき、孤立させ、「それぞれ必要に応じて取得する」がわれわれの方向であり、さらに「労働に応じてうけとる」との緊密な交替関係にあることをみておらず、「労働に応じてうけ

とる」の過渡性を無期限化した、それは毛主席の連続革命論と合致しない。(2)「労働に應じてうけとる」を万能化し美化する。「労働に應じてうけとる」は、個人的利益と国家的利益の結合するもつともよい形態であり、それは社会的生産を推進する原動力であり、現段階の唯一の分配原則であるとする。そこで、その公平合理をいうだけで、その欠点をみてとらず、多勞多得、物質的刺激を一面的に強調するのである。(3)「それぞれ能力に應じて働き」と「労働に應じてうけとる」をひきさく。「労働に應じてうけとる」をいうだけで「それぞれ能力に應じて働き」を少しいか全くいわない。こうであるなら、共產主義的労働態度は育成されず、労働はつねに生活のための手段になる。(4)労働は価値をもたないものであり、勞と酬はきりはなすべきであるが、われわれはいたるところでそれを結合する。(5)「労働に應じてうけとる」に対する理解は正しくない。技術は勞であり、生産物の質と量は勞であり、一切は経済的効果によって轉換するとし、したがって、多くの人の業務を重んじ、政治を軽視する思想的傾向ならびに中央の提起した思想と技術の關係の矛盾をつくりだす。しかし、人の労働成果の要素は、多方面にわたり、主要なものは政治思想と労働態度である。(6)「労働に應じてうけとる」を絶対化し、「労働に應じてうけとる」の科学化を追求し、「労働に應じてうけとる」の尺度

中国におけるブルジョアの権利論争

がものさしと同じように正確であることを要求し、人を制度の奴隷にしてしまう。(7)平均主義に反対することを「労働に應じてうけとる」とかたくなに混同し、そこで格差が大きく、等級が多いことを要求し、生産を刺激できると考える。

今後の分配制度に対する意見

一つの意見は、半供給半賃金制を通じてしだいに「それぞれ必要に應じて取得する」部分を拡大し、「労働に應じてうけとる」部分を縮小し、完全な「それぞれ必要に應じて取得する」に移行するとする。

もう一つの意見は、半供給半賃金制からすべてがそれぞれ必要に應じて取得することの間になお全供給制の段階があるとす。〔半供給、半賃金制〕の名詞は充分に適切でなく、転化、移行をいい「半」をいうからには、錯覚をおこしやすく、「部分供給部分賃金制」とすれば比較的に妥当であると、提案する人がいる。

供給の標準問題について、ある人は六億の人口から出発すべきであり、実際上は五億農民の生活水準を標準とすべきであると提案する。また、ある人は、機関幹部が完全な供給制を實行するなら、標準を高め定めることになり、大衆からはなれることになるかと考える。もしも生活水準を普遍的にひき下げ、こ

の方向で全職員労働者の中にひろめるならばよくない。

当面の人民公社がとっている供給制及び今後幹部の中で実行される供給制(部分供給、部分賃金制をふくむ)の性質について、一部の人が「それぞれ必要に応じて取得する」とする場合は、比較的によくの意見は、基本的に、社会主義的性質であり、「それぞれ必要に応じて取得する」の要素をふくむとする。

当面しだいに供給制を実行する問題について、ごく一部の人は「供給制を実行すれば『働いても働かなくても二斤半』になり、生産力の促進に対して障害となる」と考えるほかは、絶対多数の人は積極的に擁護しており、かれらは社会の分配制度全体は条件の変化につれてしだいに改善されるとする。

座談会は上述の問題を討論したほか、当面の大躍進の情勢にもふれ、生活の実践はすでにブルジョアの権利の残余に対して攻撃をおこない、社会的生産力の発展、人々の共産主義的自覚の向上につれて、また、工業と農業、都市と農村、頭脳労働と肉体労働の三つの差異の徐々の消失につれて、残余のブルジョアの権利も条件の成熟につれてしだいに徹底的に消滅されるであろう。社会主義をいっそう立派に建設し、さらに将来共産主義に移行するために、参会者は、社会主義、共産主義教育を強化しなければならぬと考えた。

北京大学法律系科学研究小組

「ブルジョアの権利の残余の問題 について」

わが国社会主義制度において、ブルジョアの権利の残余の及ぶ範囲は相当に広範であり、本文は経済領域におけるブルジョアの権利の残余の性質、作用及び消滅のみちすじ等の問題の検討に重点をおく。

一、ブルジョアの権利の残余の性質

マルクスは社会主義社会にふれるとき、つぎのように指摘している。すなわち、「ここで問題にしているのは、それ自身の土台の上に発展した共産主義社会ではなく、反対にいまようやく資本主義社会から生まれたばかりの共産主義社会である。したがって、この共産主義社会は、あらゆる点で、経済的にも道徳的にも精神的にも、それがうまれてきた母胎たる旧社会の母斑をまだおびている。」⁽¹⁰⁾これは、すなわち、共産主義のはじめの段階―社会主義社会はやはり資本主義社会から生まれたばかりであり、したがって、「経済、道徳及び精神」等の側面において、旧社会の残した母斑が存在せざるをえないということ

である。正に、新社会には不可避的に旧社会の母斑が存在することによって、「共産主義の第一段階（普通社会主義段階という）においては、『ブルジョアの権利』は完全に廃止されるのではなく、部分的にだけ、すでに達成された経済的変革の度合にに応じてだけ、すなわち生産手段にかんしてだけ、廃止されるのである。……しかし、ブルジョアの権利は、この権利のその他の部分では、社会の成員のあいだの生産物の分配と労働の分配との規制者（規定者）として、やはりのこっている。」われわれは、マルクス・レーニンのこれらの原理がわれわれが社会主義制度下のブルジョアの権利残余を研究する重要な指導思想であると考える。わが国の社会主義社会においては、「ブルジョアの権利」もしくは「ブルジョアの権利の残余」は、生産手段の所有関係の側面では、わが国生産手段所有制の改変、私有制度の消滅につれて消滅した。しかし、生産物の分配と労働分配の領域においては、「ブルジョアの権利」もしくは「ブルジョアの権利の残余」は依然として規制の作用を果たす。

わが国においては、生産物の分配と労働分配において、ブルジョアの権利の残余が依然として規制の作用を果たしているが、それは社会主義の時期において、旧社会が遺留した工業と農業の差異、都市と農村の差異、頭脳労働と肉体労働の差異を保留せざるをえない結果による。解放以来、党の指導の下に、

都市と農村の関係、工業と農業の関係、頭脳労働と肉体労働の関係が根本的变化を生じ、歴史的伝統の対立状態を消滅したのであるが、客観的条件と生産力の発展水準にもとづいてみるならば、なおもただちにはこれらの差異を除きとすることはできないし、工業労働間、都市農村間に完全に平等な程度を達成していないし、とくに肉体労働と頭脳労働の差異の存在は、人々を工業労働にも従事し、農業労働にも従事し、また頭脳労働にも従事し、肉体労働にも従事しうるようにはしていない。それだから、労働分配において、かなりの程度において、歴史的伝統の「旧い分業」の制約をうけるのである。

これがすなわち、工業と農業の間、都市と農村の間および頭脳労働と肉体労働の間を特徴とするような「旧い分業」である。社会主義革命の勝利にともなうて、それらの間の対抗を消滅させたが、それらの間の重大な差異を保留せざるをえない。このような差異の主要な表現は、労働に應ずる分配の原則である。「労働に應ずる分配」原則は、なおも「不平等」のブルジョアの権利の残余を保留しており、それは、生産物がなおも仕事にもとづき、労働にもとづいて分配されるからである。この原則にもとづいて生産物を分配し、人々が一定の労働を提供すれば、相應の報酬に換える権利を有するのであり、これが平等である。しかし、同一の尺度として、労働能力の強弱がそれぞれ同じでな

く、生活負担の軽重が同じでない労働者に適用される。これは享受上の差異を意味する。それゆえに、それは、なおも形式上資本主義社会の「等価交換」の原則を保留するのであり、すなわち、ブルジョアジーの提出するものであるが、実際上は実現できない原則―「等価交換」「平等」が生産物の分配において、規制の作用を果たし、それはなおブルジョアの権利の狭い限界をこえない。明らかに、これはやはりブルジョアの権利の残余である。

このような旧社会から生まれ出た母斑は、社会主義制度そのものの産物ではなく、資本主義社会が遺留したものであり、それとブルジョアの権利は必然的な歴史的連関性を有しており、それとともに原則的区別を有する。社会主義制度下において、経済領域において保留されているブルジョアの権利の残余、それはすでに資本主義国家における完全なブルジョアの権利でなくなっただけでなく、それが包含する内容からいえば、それはすでにブルジョアジーが掌握せず、ブルジョアジーに奉仕せず、それによって資本主義を發展させず、労働者階級が指導する国家によって掌握され、社会主義に奉仕し、それによって社会主義を建設するのである。それは、ブルジョアジーの意思を反映しないし、ブルジョアジーの利益をも代表しない。同時に、わが国社会主義制度下において、ブルジョアジーの生産手段私有制を消滅し、小農経済を改造したことによって、ブルジ

ョアの権利を生みだす経済的基礎を消滅したのである。階級の暫次の消滅、人が人を搾取することの消滅によって、ブルジョアの権利を生みだす社会的基礎を消滅するのである。それゆえに、社会主義制度の下において、ブルジョアの権利の残余が保留されるが、その形式を利用して、新しい内容を賦与するにほかならない。

ブルジョアの権利のこのような性質は、マルクスとレーニンの古典著作において、早くも詳細で徹底的に分析されている。しかし、ある同志は、ブルジョアの権利が形式上の平等によって、事実上の不平等をおおいかくす以上、社会主義制度下のブルジョアの権利の残余にも事実上の不平等が存在し、したがって両者の間に、原則上の区別はなく、量的な差異だけであると考える。われわれは、このような見方は問題の本質を軽視し、二種の不平等の原則的区別を混同することになると考える。

平等という概念は、抽象的でなく鮮明な階級性を有するということを理解しなければならない。したがって、階級的観点をはなれば、何が平等であり、何が不平等であるかを理解できない。プロレタリアートの平等要求は、プロレタリア革命によって、また、プロレタリア独裁によって生産手段私有制を消滅し、搾取階級を消滅し、ブルジョアの権利の残余とブルジョアの権利思想を消滅してこそ、完全に実現することができる。わ

が国においては、プロレタリア革命によって、プロレタリア独裁を実現し、生産手段私有制は基本的に消滅し、搾取階級の不平等は基本的に存在しなくなった。しかし、さらにもう一つの「不平等」があり、これこそ現在討論中の「不平等」のブルジョアの権利の残余の問題である。この「不平等」と資本主義社会においてブルジョアの権利の保護する不平等は、不平等の性質、不平等を生む根源及び包括している範囲、不平等を消滅するみちすじからいえば、いずれも根本的に異なる。

第一に、ブルジョアの権利が保護する不平等は、ブルジョアの利益と結びついており、ブルジョアジーがプロレタリアートを圧迫・搾取する不平等である。それは、生産手段の私的所有の基礎にもとづく不平等である。社会主義制度の下に存在する「不平等」のブルジョアの権利の残余は、社会的生産力の発展水準がまだ高くなく、社会的生産物がまだ充分でなく、さらに人々の思想道徳の面貌がまだ完全に共産主義化されていないことにもとづいて形成されるのであり、ただ人々の生産物の分配において、なおも事実上の差異があるにすぎないのである。第二に、この二種の不平等は、範囲においても根本的に異なる。ブルジョアの権利が保護する不平等は、ブルジョアジーが経済上生産手段を所有して働かずして所得を得、政治上特権を享有し、文化教育上は知識の独占者であり、プロレタリアート

は何も所有しないことを含む。社会主義制度において、ブルジョアの権利の残余が表現する範囲は、主として生産物の分配において存在する事実上の差異を指す。わが国においては、法によって何らかの権利を剝奪されている人以外は、人々は経済上、政治上、文化生活上、いずれにおいても平等の地位にある。

第三に、正に二種の不平等には根本的な区別が存在することによって、不平等をなくすみちすじにおいても根本的に異なる。ブルジョアの権利が保護する不平等に対して、社会主義革命の手段を用いなければならず、したがってこのような不平等をなくすことは、はげしい階級闘争である。ブルジョアの権利の残余が存在する事実上の差異に対しては、生産力の水準を高度に発展させ、人民の共産主義的自覚を向上させることによって達成される。それゆえに、このような「不平等」を消滅するには、政治思想領域において、さらにブルジョア思想と闘争をおこなわなければならないことはもとより、生産を大いに発展させ、自然と闘争しなければならない。

以上の分析にもとづくと、次のようにみることができ。この二種の不平等は完全に二種の異なる範疇の不平等に属し、明確に区分しなければならず、われわれはブルジョアの権利の残余が人々の間に存在する事実上の差異を形式からのみ決してみることができず、そうすればブルジョアの権利と社会主義制度

下のブルジョアの権利の残余という二者の原則上の区別を混同することになる。

そのほかにある同志は、ブルジョアの権利の残余がブルジョアの権利と同様にいずれもブルジョアの上部構造であると考ええる。このような観点も正しくない。社会主義社会におけるブルジョアの権利の残余で主要なことは、消費材の分配面の「労働に応ずる分配」原則を指すということとわれわれは知っている。資本主義社会においては、生産手段の所有の多寡にもとづいて分配をおこなう。「労働に應ずる分配」「働かざるものは食うべからず」は、正に資本主義的分配原則と根本的に対立する。ここからみられるように、ブルジョアの権利の残余の主要な表現としての「労働に應ずる分配」原則は社会主義的性質のものであり、プロレタリアートの利益に奉仕するのであり、それは社会主義社会の上部構造である。

それでは、お前は、それはブルジョアの権利の残余であるといい、また、それは社会主義の上部構造であり、社会主義的性質のものであるというが、それは矛盾しないかと問う人があるかも知れない。マルクスが「労働に應ずる分配」原則をブルジョアの権利とよび、それは原則上(すなわち「等価交換」の平等権利)ブルジョアの権利の狭い限界をこえず、共産主義的理想と比較すれば、一つの欠陥であるとわれわれは考える。この点を

指摘することは重要な意味をもち、労働に應ずる分配は旧社会に比べれば大きな進歩であるが欠陥のあることをわれわれに教えている。従って、それを盲信せず、正しくそれによって社会主義建設に奉仕し、また条件をつくりだして、それを消滅させるのである。しかし、マルクスは、ブルジョアの権利の残余は資本主義社会の上部構造にすぎないとは決していわなかった。というのは、労働に應ずる分配という原則は、ブルジョアジーの所から「等価交換」の原則をとり出して、それを分配の上を用いるはかに、労働に應ずる分配とブルジョアジーとはなんの関係もないからである。「等価交換」の原則についていえば、それは社会主義社会において、また社会主義社会においてはじめてこの原則を真に実現した。しかるに、資本主義社会においては一つの形式、外面にすぎない。正に、このようであるから、われわれは、「労働に應ずる分配」原則は、ブルジョアの権利の残余であるが、一定段階において、それは、ブルジョアジーとの闘争の武器であると考えるのであるが、また、その真実の内容と実質についてみれば、それは資本主義的搾取制度とやはり根本的に対立する。ところが、もしも「労働に應ずる分配」がブルジョアの権利の残余でもあり、資本主義社会の上部構造でもあるというなら、それなら社会主義経済の基礎の上に樹立された上部構造がなぜブルジョア的であるか理解しようがなくなる

のではない。正に、社会主義制度下の「労働に應ずる分配」原則は、社会主義の上部構造であり、プロレタリアートの利益に奉仕するので、それは社会主義の経済的基礎と照応し、社会主義建設において積極的作用を果たすことができる。

二、ブルジョアの権利の残余の作用

わが国においては、社会主義から共産主義に移行するまで、社会的性質はやはり社会主義である。社会主義の分配原則は、「それぞれ能力に應じて働き、労働に應じて分配する」である。この分配原則は、基本的にわが国の経済条件と人々の思想的自覚水準に適合し、したがって不可避的であり、一定時期においてそれは社会的生産力の発展に対して積極的な促進作用を果たす。同時に「労働に應ずる分配」原則が依然としてブルジョアの権利の狭い限界を超えないので、一定の消極的作用をもっている。

「労働に應ずる分配」の積極的作用は、主として次の点に表現される。

1、わが国は解放前、半封建・半植民地の国家であり、経済、文化がたちおかれており、工業は発展しておらず、生産力の水準もまだ低い。したがって、「労働に應ずる分配」の原則を徹底的に実行することは、統計と生産の監督、労働分配の

合理的実施、生産責任制と経済計算制の樹立に役立つのである。このことは、生産の発展に有利であり、社会的生産物の増加に有利であり、社会主義の建設、及びしだいに共産主義に移行するために条件を準備することに有利である。

2、人々は、旧社会では長期にわたって搾取階級の思想的影響を受けているので、何人かの人の思想の中には、肉体労働を軽視し、報酬に應じて働き、少なく働いて多く得、働かずに得る、等々の搾取思想があり、まだ短期間内に一掃できない。正に、「労働に應ずる分配」原則が労働の基礎の上に樹立されることによって、これらの思想を具有する人々をして、しだいに労働に対する態度をかえさせ、労働を重視し、労働を熱愛する観点を育成し、「労働光榮」の社会的気風をつくりだすのである。

3、「労働に應ずる分配」原則が体现する「働かざるものは食うべからず」は、資本主義的な「働かずに得る」分配原則の対立物として出現した。「労働に應ずる分配」は、労働を社会的消費生産物分配の尺度とし、これは働かずに得るといふことと比較して最大の平等である。同時に、それは、長期にわたって労働をはなれる搾取階級と搾取制度が育成した、安楽を好んで働くことを嫌がる人々に対していえば、彼らを労働に参加させ、また労働において自己を改造することは、明らかに重

大な革命的措置の一つである。

事実が証明するように、党の指導の下に、わが国の生産水準は不断に高まり、躍進に躍進を重ね、生産力は空前に増加し、同時に人々の思想的面貌も迅速に改まりつつあり、分配制度において労働に應ずる分配の原則をとることは、すでに一定の積極的作用を果たしているべきである。

「労働に應ずる分配」原則は、上述の積極的作用を有するが、生産水準が不断に発展する条件の下に、その消極的作用もしだいに増大している。これはつぎのことによる。

まず、人々の体力の強弱、技術水準等の違い、さらに収入の多少の差異があり、したがって「労働に應ずる分配」原則をとることは、必然的に事実上の差異が存在する。同時に、労働に應ずる分配は、何人かの正しくない労働態度をも助長する。例えば、出来高賃金制は若干の人々にノルマを問題にさせ、あれこれ文句をつけて選び、生産物の質を軽視し、原材料を浪費させる等々、その結果はまた一定程度において、社会の生産力の発展を阻害してしまう。

そのつぎに、「労働に應ずる分配」、各人の収入の違い、物質享受上に差異があること、このことは、何人かのブルジョアの私利私欲の思想と雇傭観点、個人的利益をはかること及び等級観念を助長しやすく、その結果、一定程度において、大衆の思

想的自覚の向上を阻害したのである。

当然に、何人かのブルジョアの思想とブルジョア的生活方式は、「労働に應ずる分配」原則によって、完全にはつくりだされず、「労働に應ずる分配」原則は、一定の助長作用を果たすだけである。したがって、われわれは、若干の同志が一切の不良現象及びブルジョア思想を「労働に應ずる分配」に入れることには同意しない。そうでないなら、どうして同一の「労働に應ずる分配」制度において、ある人は労働の中で模範、英雄になり、また、ある人はなまけ者になるかを理解できないであろう。ここで、政治による統率は人々の共産主義の思想的自覚を向上させ、「労働に應ずる分配」の積極的作用を發揮し、その消極的作用を制限する上で、特別に重大な意味を具有するということを、われわれにいつそうはつきりと認識させるのである。ここからわかるようにわれわれが「労働に應ずる分配」原則を運用するとき、物質奨励の作用をみるだけでなく、いっそう重要なことは政治・思想工作の作用をみなければならず、物質奨励と政治思想工作を密接に結合しなければならず、物を見るだけで人をみないことがあってはならない、ということである。「政治による統率」はまず社会主義の原則を認め堅持し、右傾保守主義に反対し、左傾冒險主義にも反対し、また、わが国社会内部の矛盾を正しく処理するのである。従って、大衆に

対して政治思想教育を行なう原則と大衆に物質的利益に関心をもたせる原則を統一しなければならず、このようにして「労働に應ずる分配」の原則制度そのものもたらしめた消極的作用を、完全に克服することはできないが、しかし一定の程度においてこのような副作用の発展を制限することができ、共産主義の分配制度をしいに実現するために精神的条件をつくりだすことができるのである。

ブルジョアの権利の残余が社会主義制度の下に存在することは、不可避的である以上、われわれはいかに対処するか。この問題を正しく解決するために、現在存在する二種の主要な誤った見方を重点的に批判しなければならない。

一つは、「労働に應ずる分配」に対して一げきの下になくす態度である。かれらは、共産主義社会の標識が「必要に應ずる分配」である以上、直ちに「労働に應ずる分配」の社会主義原則を放棄し、近い将来共産主義社会に入っていくように、「必要に應ずる分配」を実行することを考える。これらの同志は、社会主義と共産主義の連関と区別を明確にせず、革命発展の段階論を理解せず、社会主義社会と共産主義社会が経済上の発展程度において異なる二つの段階であることを理解しない。社会主義の原則は、「それぞれ能力に應じて働き、労働に應じて分配する」であり、共産主義の原則は、「それぞれ能力に應じて

働き、必要に應じて分配する」である。この二つの段階にはこえられない境界はなく、前者は後者に移行できるのであるが、両者の間にはやはり一線があり、勝手にこえることはできない。社会主義から共産主義への移行は、相当に長く相当に複雑な発展過程であり、この複雑な全発展過程において、共産主義の要素は日ましに増大するが、社会の性質は依然として社会主義的であり、したがって生産物の分配も「労働に應ずる分配」原則を基礎とするしかない。もしも現実の条件を顧みず、社会主義段階をこえようとはかり、「労働に應ずる分配」を取り消して「必要に應ずる分配」を実行するならば、結果は必然的に社会発展の法則性と革命発展の段階性に違反することによって、革命事業に混乱と損失をもたらすことになる。われわれが、どのような分配方式をとるかは、人々の主観願望によっては決定されず、生産手段所有制の性質と社会的生産物の豊富さの程度に決定されるのであり、「必要に應ずる分配」はいっそう完全で合理的の制度であるが、それは社会的生産物がきわめて豊富になった以後にこそ実現できるのであり、もしも当面の生産発展水準をはなれるならば、条件未成熟のときに無理に必要に應ずる分配を実行することになる。その結果は必然的に人々の労働の積極性を妨げ、生産の発展に不利であり、社会的生産物の増加に不利であり、共産主義の実現にも不利である。これは軽率

な表現であるだけでなく、人民の心中にある共産主義の標準を大いに引き下げてしまい、共産主義の偉大な理想は歪曲と通俗化をこうむり、小ブルジョアジーの平均主義的傾向を助長し、社会主義建設の発展に不利である。従って、共産主義の事業を真に熱愛するすべての人々は、条件がまだ具備しないときに、決して「労働に応ずる分配」原則を廃棄しようとしてはならず、まず、熱心にわれわれの生産力を発展させ、大いに意気こみ、われわれの社会主義建設の総路線を実現し、共産主義に移行するために、充分な物質的条件と精神的条件を準備しなければならぬ。

もう一つの誤った見方は、「労働に應ずる分配」原則を絶対化するものである。彼らは、「労働に應ずる分配」は、絶対合理的で、最も公平であると考えている。彼らは多く働いて多く得ることはきわめて当り前のことであり、なにがなんでも動かさないと考へる。明らかに、これは「労働に應ずる分配」の平等の一面をみているにすぎず、その不平等の一面をみてもならず、分配において労働に應ずるといふ尺度をみるだけで、今日の現実生活においてすでに、「必要に應ずる分配」の萌芽が出現していることをみないのである。従って、それを万古不変の真理であるとみなすのである。このような思想の実質は、社会主義社会を永遠不変のものとみなしており、一切の事物が客観的法則

にもとづいて不断に発展変化するものであり、社会主義から共産主義へ進み入ることは、社会発展の客観的法則であることを理解しない。社会主義社会は共産主義社会の第一段階であり、共産主義社会は社会主義社会の発展の必然的趨勢である。事実が証明するように、わが国の社会主義の発展につれて社会の生産物は日まじしに豊富になり、人々の思想的自覚は不断に向上し、工業と農業、都市と農村、頭脳労働と肉体労働の間の差異も日まじしに縮小し、しだいに消失するであろう。そこで、「労働に應ずる分配」原則の消極的作用がしだいに明らかになるだろう。したがって、社会主義の一定の発展段階において、「労働に應ずる分配」原則の徐々の消失は、同様に必要で不可避的である。そういうわけで、われわれはブルジョア的権利の残余問題に対処するに、一方でそれが存在する不可避性をみなければならず、他方でそれがしだいに消失する必然性をもみなければならぬ。

三、ブルジョア的権利の残余を打破する

基本のみちすじ

ブルジョア的権利の残余を打破するには、まず、大いに社会の生産力を発展させなければならないということをし、われわれは知っている。全国解放後、党は全国人民を指導してわが国の

社会生産力を解放し発展させることに對して、怠ることのない闘争を行なつた。三大改造が勝利をかちとり、社会主義建設過程において、党は大いに意気ごみ、つねに高い目標をめざし、多く、はやく、りっぱに、むだなく社会主義を建設する総路線を提起した。総路線の基本精神は、高速度にわが国の社会生産力を発展させることである。農業生産協同組合から人民公社への転換、社会主義的集団的所有制から社会主義的全人民的所有制への移行、さらに社会主義から共産主義への移行を問わず、いずれも一定程度の生産力の発展を基礎とする。それとともにわが国の生産関係のいくつかの变革をも反映し、社会的生産力のいっそうの発展を示し、それぞれの転化と移行は、また異なる質的変化を反映する。

社会主義建設の総路線を實現し、高速度にわが国の工業生産を發展させるために、党はいくつかの併進の方針を提起した。いくつかの併進の方針の意義は、わが国社会主義建設の速度を加速し、わが国社会生産力の大發展を推進し、それとともに、工業と農業の緊密な結合を實現し、都市と農村の間の差異を急速にちぢめる具体的みちすじである。従つて必然的にこれらの差異を反映する、ブルジョアの権利の残余の徐々の弱化和漸次的除去に有利である。

いくつかの併進の方針は、わが国の社会組織の基層単位、す

中国におけるブルジョアの権利論争

なわち人民公社が工業を経営すること、公社工業化の促進に役立つ。人民公社が工業を経営する結果によつて、農村はすでもはや單純に農業生産に従事せず、このような工業もやり農業もやる發展の趨勢は單に農民の働く場所の單純な改善であるのみならず、また、農民が農業生産と區別される工業生産技能を學びとつたとみることもできず、農業生産の労働条件がだいに變化しているとみるべきである。わが国工業生産の發展によつて、農業生産はたえまなく最新の技術裝備をかちとり、機械によつて人々の負担の大きな労働によつてかえ、「農業生産工業化、田地管理工場化」の方向に發展している。このようにして、工業生産は緊密に結合し、わが国農民も近代科学技術を習得し、農業生産にも従事し、工業生産にも従事する新型の労働者になつたのである。労働者農民の間の、労働条件の隔たりによつてつくりだされる差異もしだいに除去されるのである。

農業生産の發展および人民の生活水準の向上によつて、農村基層工業は比較的全面的に發展し、生産手段を生産する工業もあれば生活手段を生産する工業もある。全国の広大な農村がひとたび工業をおこせば、わが国の工業には一面の繁栄盛況があらわれ、わが国の工業体系を形成し、旧社会が残した、社会主義生産に不利な分業現象はしだいに消滅するであらう。農村工業生産の全面的發展の条件の下で、わが国農村の面貌は根本

的にあらためられ、もともとたちおけている農村を先進的な工業化された農村に変えるのである。同時に農村工業の発展につれて、農業生産はしだいに機械化と電化を実現し、機械化と電化の発展につれて、農村の交通条件、郵電通信設備、科学、文化、教育及び衛生等の事業は、相応の改善と発展をかちとり、これと同時に古い都市も根本的な改造をみたのである。党の八期六中全会は、わが国現有的都市を改造し建設する方針を指摘した。「都市の人民公社も、将来は都市の特徴に適した形態をとって、古い都市を改造し、社会主義の新しい都市を建設する手段となり、生産、交換、分配および人民の生活、福祉の統一的な組織者となり、工業、農業、商業、文化・教育、軍事を結び合わせた、行政と農業社経営の合体した社会組織となる。」⁽¹³⁾このようにして、農村と都市の差異もしだいに消滅するであろう。当然ながら、これらの差異を反映するブルジョアの権利の残余もしだいに消失するであろう。

ブルジョアの権利を反映する、この三つの差異を一掃する中で、最後に消失するものは頭脳労働と肉体労働の差異であろう。社会主義制度の下において、労働者と農民の差異は主として全人民的所有制と集団的所有制の「差異」⁽¹⁴⁾にもとづいて形成されるのであり、都市と農村の差異は、実質的には労働者と農民、工業と農業の間の差異の反映である。労働者と農民、都市

と農村の間の差異は、二種の異なる肉体労働と二種の異なる社会的生産の差異の反映にはかならず、階級対立の性質を帯有せず、また、人民公社の樹立と発展、集団的所有制の改善、工業併進、工業もやり農業もやること等につれて、二つの差異をしだいに消失させ、頭脳労働と肉体労働の間の差異の消失は、積極的に生産力を発展させることはもとよりであるが、比較的に長期の共産主義教育およびいっそう複雑な思想闘争の過程をへなければならぬ。

頭脳労働と肉体労働の差異を一掃する側面において、党はわれわれに明確な方向を提示した。実践がすでに証明しているように、頭脳労働と肉体労働の結合は、両者の間の差異を消滅するもっともよい方法であり、「知識分子工農化、工農大衆知識化」は、唯一の正しい道であり、頭脳労働と肉体労働の差異を消滅することを語るとき、ただ肉体労働者を知識分子、工程師、技師の水準にまで高めることを強調するだけで、ブルジョア知識分子に対する改造を軽視することはできない。広汎な工農勤労大衆についていえば、かれらが旧社会において文化科学技術を学習する権利を奪われたことよってつくりだされた、文化科学上のたちおくれた状態を徹底的に改めるべきである。他方において、知識分子に対する改造をも軽視することはできないし、わが国の少なからぬ知識分子は、長期にわたりブルジ

ヨア教育をうけ、大衆からはなれ、実際をはなれ、肉体労働を軽視している。従って、彼らが肉体労働に参加して鍛錬するよう動員し、肉体労働において思想を改造し、ブルジョアジーの立場観点を徹底的に転換し、また、生産技術と実践経験を学習し、かれらを手脳併用及び自分の力で食べていける勤労者になければならない。

「工農大衆知識化、知識分子工農化」のために、党は前後して、学校が工農に対して門を開くこと、教育はプロレタリアートの政治に奉仕し、教育と生産労働の結合、教育事業、文化革命、技術革命を大いに発展させ、幹部の下放、幹部の肉体労働への参加、企業における「兩参一改、三結合」⁽¹⁵⁾の実施等の一連の方針政策を提起し、貫徹した。これらの方針政策の実施はわが国工農大衆と知識分子の面貌を大いに改め、しだいに頭脳労働と肉体労働の差異を縮小した。

工農業大躍進と人民公社化運動の推進の下に、現在わが国には文化革命と技術革命の高潮がおきている。つぎのように予想することができよう。わが国人民は党の指導の下に、生産の発展につれて、旧社会が残してきた頭脳労働と肉体労働の差異をしだいに縮小し、最終的には消滅させるであらう。

工業と農業の差異、都市と農村の差異、肉体労働と頭脳労働の間の差異、及びこれらの差異を反映する不平等のブルジョア

的権利の残余は、経済文化の発展、人民の共産主義的自覚の向上につれて、しだいに消滅するであらう。したがって、社会主義及び共産主義の思想教育を展開し、党の指導を強化し、ブルジョアの権利思想の残余に対して大いに批判をおこない、人々の思想領域から破棄一掃すること、このことはブルジョアの権利の残余を消滅させるもう一つの重要な措置である。過渡期において、ブルジョアの権利の残余が不可避的に存在し、しかも、今後の相当の期間、分配制度においてなおもその作用をもつからには、人民の共産主義的自覚を向上させることに對して、及びブルジョアの権利思想を批判することに對して放任の態度をとることは、われわれには認めることができないものであり、これは全く誤りである。ブルジョアの権利思想の存在が必ずや人々に対して腐蝕作用を果たしており、また、思想における階級敵が一掃されておらず、人々の共産主義的自覚も向上していないということをみるべきである。この意味からいえば、共産主義思想教育をおこない、ブルジョアの権利思想を徹底的に一掃することは、ブルジョアの権利の残余を消滅する精神的条件である。もとより、生産の発展そのものが、人々の自覚水準の向上を推進するのではあるが。

ブルジョアの権利思想を大破し、同時に共産主義思想を樹立することは、統一的な思想闘争の過程である。古いものを一掃し

てこそ、新しいものを樹立することができる。旧いものがいかに一掃されたかは、新しいものがどのように樹立されたかを主要な標識とすべきである。したがって、ブルジョアの権利思想を一掃すると同時に、党の社会主義と共産主義思想教育を強化する方針を貫徹し、共産主義教育を大に行ない、人民の共産主義的思想自覚と道德的品性を不断に向上させなければならぬ。

全国人民は整風と反右派闘争、工農業大躍進及び人民公社化運動を経て、思想的自覚が大いに向上したことを指摘すべきであるが、ブルジョアの権利思想が若干の人々の思想の上にも深い影響をもっていることを是認しなければならぬ。従って、断固として批判しそれと決裂し、共産主義思想によってそれにとつてかえなければならぬ。

上述のことをまとめると、ブルジョアの権利の残余を打破する基本的みちすじは、社会の生産力を高速度に発展させること、大いに人々の共産主義的思想水準を高めること、また、この基礎の上に都市と農村の差異、工業と農業の差異、頭脳労働と肉体労働の差異を消滅することである。当然のことであるが、三つの差異が消失すれば、これらの差異を反映する不平等のブルジョアの権利の残余もおのずから消失するであろう。

注(1) 『毛沢東選集』(外文出版社版)第一卷一〇一頁以下。

(2) 『国民文庫』四三頁。

(3) 『マルクスエンゲルス8巻選集』第4巻二六二—三頁。

(4) 『国民文庫』六四頁。

(5) 『魯迅 阿Q正伝／狂人日記／他』(竹内好訳河出書房)五六頁。

(6) 「三風」とは、「学風」「党风」「文風」をいい、「五氣」とは、官僚風・退嬰・ぜいたく・おごり高ぶり・甘い考の五つの排斥すべき気風をいう。

(7) 原文は、「資本主義的法権」となっているが、「資産階級的法権」の誤植であろう。

(8) 本誌の二四八頁にみるように、張春橋は、「ブルジョアの権利思想の核心は等級制度である」とのべているが、ここではどうしてか思想がおとされている。

(9) 「車旁提成」の内容がわからないため原文のままにした。

(10) マルクス『ゴータ綱領批判』(国民文庫)四三頁。

(11) レーニン『国家と革命』(国民文庫)一三五頁。

(12) 「資産階級式的権利」を「ブルジョアの権利」、「資産階級法権残余」を「ブルジョアの権利の残余」とそれぞれ訳した。前者は、マルクス・レーニンの古典の当該箇所中国語訳に使われており、後者は、議論の中で用いられるようになった中国語表現である。

(13) 日本国際問題研究所中国部会編『大躍進政策の展開』(上巻)三八頁。

(14) 「差別」がおとされいていると思われる。

(15) 両参謀部が生産労働に参加し労働者が企業管理にすること、一改業務諸規程を実情に合致するように大衆討議により改正すること、三結合指導幹部、労働者、技術者の結合。